

国木田独歩について

—『帰去来』制作の意味—

(I)

国木田独歩は『帰去来』を明治三十四年五月に発表しているが、その作品の題材は青年時代、明治二十四年の山口県熊毛郡麻郷村への帰省の経験からとったものであることはよく知られている。

このころの独歩は民友社の平民主義、「自然尊重、反都会主義」の影響を強く受けていたために、田舎の若者に自己の思想・学問を施すという理想をもっていた。そして二十四年十月に田布施村に於て波野英学塾を開く。

しかし当時のとかく閉鎖的になりがちな農村では、自由・平等・自我の確立を目指す独歩の思想は「危険

尾 崎 あゆみ

思想」であつた。そのために波野英学塾は村民の妨害で挫折の憂き目にあう。

更に、麻里布村の豪商石崎家の次女トミとの悲恋によって「家」観念を認識させられたことは青年独歩にとって大きな痛手となつたらしい。理想郷として思い描いていた田園とは大きな隔たりがある前近代的な農村社会に失望した独歩は、二十五年六月に上京した。

以上のような境遇にあつた独歩は、『帰去来』の主人公峯雄に自己との共通点を次のように持たしている。

まず、田園の生活を志向している点が挙げられる。峯雄は故郷の自然に触れると共に、今までの都会の生活が「只だ日一日と何者か眼前三尺の先に浮動する処の金色体を逐」う「奴隷の心情の狂態」に思え、真の

幸福、自由の生活は「此山林にあるのだ！」と決意するのである。

また、もう一つは峯雄の悲恋である。彼が未来の妻と心に定めた小川綾子は、峯雄を慕いながらも父の一存で決めた結婚を従順に受けようとして下男に無理心中をさせられたが、その犠牲を通して峯雄は初めて封建的な田舎の社会、都市の「狂態」よりも低次元な社会を認識するのである。

しかし、独歩と峯雄には微妙な違いがあることに注意したい。ここでは二者の立場のずれ、後に自然観の違いについて述べたいと思う。

独歩は民友社の影響を受けて「反都会主義」^(注6)になっているところへ東京専門学校のストライキ失敗という事件があり、それが引き金となって都市の生活を捨て、「田舎の生活の中に真正の美を発見して人生の再出発をし」^(注8)ようとしたのである。

一方吉岡峯雄は、「真の幸福は此谷にあるのだ」という決意をしているものの、それは

「然し直ぐ此ま、で東京に帰らないといふのではなく、兎も角、従前の通り都会に居て、思ふ放題に働いて自由に生活して、其で面白くないやうなら、何時でも、直に足の塵を払って此故郷に帰て来

る。」

という程度のものである。つまり峯雄の「田園生活」は、都会での生活に疲れた後の隠遁生活であり、「不羈、独立、自由」の生活、というほどのものではない。よって都会での「金色体を逐う」生活から抜けようとしていないと見てよいだろう。

しかし、独歩の方も都会での「奴隷の心情」である立身出世の夢を完全に捨て去ったかというところではない。彼は「郷党を集め、所謂精神教育を施したし。」^(注9)という希望をもって波野英学塾を開くが、これは明らかに同郷の吉田松陰の松下村塾を意識している。^(注10)

従って彼には自らの思想、学問を若者に鼓吹する教育者として名を成す願望が、密かにあったのではないだろうか。もっと言うならば、立身出世の願望の場が都市から田園に移ったに過ぎないのである。

しかし、一方では「潔く山間に一農夫となれ」^(注11)という理想をもっている事から、彼には相剋があつたと考えられる。確かにどちらの理想も生活の場はあくまで田園であるが、一方は現世的な野心を、一方では平凡人の生活を望むのである。

それに対し、はじめから生活の場を都会に決め、名利競争の念を捨てない峯雄にはこの相剋はない。

(II)

麻郷から上京して間もなく、独歩は希望に燃えて入社した自由社^(注12)の解雇、編集を手伝っていた『青年文学』の廃刊^(注13)(明26・5・13)、父の免職とまさに生活上の危機に立たされた。

そして自活の必要に迫られた彼は、徳富蘇峰を通じて矢野龍溪から薦められた大分県佐伯町の鶴谷学館の教師の職を引き受けた。

さて、この頃の独歩の日記には「シンセリティー」あるいは「シンシリティ」という語がしばしば見られる。

「シンセリティーとはわれ之を至誠と訳したり。非なり。『赤条々の大感情』これぞシンセリティーの真意なりける。」^(注14)

「『シンシリティ』ならざる信仰は死せる信仰なり。

『シンシリティ』は『アーネスト』なり。」^(注15)

と独歩は説いている。そして彼はこの「シンシリティ」感を追ってやまないのである。

また、この「シンシリティ」を真の入口とする「個人感」と「社会感」を対比させ、独歩自身は「天地の間」^(注16)^(注17)

に己れを見いだす「個人感」であろうとするが、一方の「社会」の中に己れを見る「社会感」にも引かれるという相剋に悩んでいた。そして、この「個人感」をもっと強力なものとするために、

「只だ人間を見るのみ、只だ自然を見るのみ、只だ人間内部の生命を見るのみ。自然の底、神を見るのみ。」^(注18)

という決意をもって東京を發つたのであった。

その頃ワーズワースに心酔していた独歩は『不可思議なる大自然(ワーズワースの自然主義と余)』(明41・2・1)の中で

「〔前略〕余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出来なかつた。人間と相呼応する此神秘にして美妙なる自然界に於ける人間なればこそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事実として余に現はれたのである」

と述べているように、佐伯の豊かな自然にあって人生と自然とを「連感対感」^(注19)するワーズワース的自然観を持つのである。

そして、その延長として新しい意識が生じる。

「嗚呼自然、汝と人との幽玄なる関係を吾に語れよ。」^(注20)

「嗚呼何故に吾等は此宇宙の裡に生れ乍ら此宇宙を驚き怪まねばならぬ乎。知りたきは生命のなぞなる故。」

というように、自然を形づくる「宇宙」と「人間生命」の不可思議な關係を解こうとしているのである。この「個人感」から生じる独歩の姿勢は、佐伯の自然の中だけでなく上京後（註22）もなお続いている。

「（前略）紛々として大都の生活を見よ。紛々茫々として宇宙暗し。たゞ信仰あらしめよ。吾が在る処の無窮不思議の宇宙にして而して吾が住む処は此紛々たる人の世なり。」

と、都市の喧操虚栄を独歩は嘆くのである。

ところでこの、自己を都市の中に置きながらその生活を否定する、という姿勢は『帰去来』の峯雄に似通ってはいないだろうか。

峯雄もまた、生活の場を都市に置きながらもその生活を「奴隸の狂態」と否定している。

しかし改めて独歩の理想と峯雄のそれを比べると、明らかな違いが出てくるのである。

独歩の場合、彼が憧憬するのは「天地の間」に己れを見いだす「個人感」を持つことであり、しばしば瞑想に耽った問題は「宇宙と生命の不可思議な關係」で

ある。この独歩の真摯な問いにもはや「都市」、「田園」という場所的な二元論は存在しない。どちらも同じ「宇宙」として独歩の前に現われている。

それに対し峯雄の理想は、「心に多少の準備」をもつて「田園生活を営む事」である。

小川の主人に語っているように「山の世話か田の世話をして長閑に暮ら」す事である。

しかし、この理想は都市に於ては実現できない。つまり、峯雄は「都市」と「田園」を別個にとらえている。よって、彼の「自然」はあくまで天地山川の「自然」であって、その奥にある「宇宙」までは見定めていないのである。

（Ⅲ）

青年独歩にはもう一つ、自らの理想の実現のために都市を離れた経験がある。明治二十八年九月の「（前略）自由独立信仰のために必ず実行すべきものなり（後略）」という決意を持っていた北海道への旅である。

この旅の事は『予が作品と事実』（明40・9・15）の「空知川の岸边」の項に

「これは小説とは言ひ難からんも、紀行文の積で書きしには非ず。(中略) 此編の主人公は余自身にして其事件は皆事実なり。主人公の感想は余の感想なり。」

と記されていることから、作品『空知川の岸边』(明35・11・1)を通してその内容を詳しく知ることができ。ここに表われる自然観もまた、峯雄の自然観と比べてみたいと思う。

土地の選定をするために空知川へ向かっている主人公は、「人口稠密の地に成長して山をも野をも人間の力で平げ尽したる光景を見慣れ」ていたので、北海道の自然にはすっかり魅きつけられていた。

札幌から空知太への汽車の中、彼は荒涼とした風景を見ながら空想に沈む。彼は「如何にして社会に住むべきかといふことは全然其思考の問題としたことがない、彼はたゞ何時も何時も如何にして此天地間に此生を託すべきかといふことをのみ思ひ悩んで」いるのである。ここに、佐伯時代以来の独歩の「個人感」追求の姿勢が見られる。

主人公はしかし、「自ら求めて社会の外を歩みながらも」陰鬱な車窓の風景を見るにつけて、孤独の感に堪えないのである。また、旅人宿の二階で乗り換えの

汽車を待つ間も、「今や森林の中に自由の天地を求めんと願ふ時、決して女々しくはならぬ。」と氣を引き立てるが、「要するに理想は冷やかにして人情は温かく、自然は冷厳にして親しみ難く人實は懐かしうして巢を作るに適している。」と思ひながら悶々として二時間ばかりを過ごす。

その翌日、彼は宿の子に案内されて空知川の岸へ出発した。そして首尾よく道庁の属官と会え、土地を選定してもらった後近くを散歩するために小屋を出た。

彼は「原始の大森林を忍びやかに過ぎゆく時雨」の音に限りない淋しさを感じ、「生物を冷笑する自然の無限の威力」を覚える。さらに森林の奥深くに座して、「社会が何処にある、人間の誇り顔に伝唱する「歴史」が何処にある。此場所に於て、此時に於て、人はただ「生存」其者の、自然の一呼吸の中に托されてをることを感ずるばかりである。露国の詩人は曾て深林の中に座して、死の影の我に迫るを覚えたと言つたが、実にさうである。又た曰く「人類の最後の一人が此地球上より消滅せる時、木の葉の一片も其為にそよがざるなり」と。」

このような腹想に耽つていたのであった。

彼はその後「一家の事情」によって二度と北海道へ

行くことはなかった。しかし「空知川の沿岸を思うと、あの冷厳なる自然が余を引きつけるように感ずる。」のである。

この当時独歩は国民新聞社の記者であつたが、

「雇はる、者ハ如何なる口実と体裁とを以てするも多少の奴隷たるを免ぬがれず。寧ろ自然と戦ふ可し。労苦を選んで自由を取るべきなり。」

という決意をもって、「紛々たる人の世」を捨ててつもりであつた。しかし、北海道にあつたものは余にも冷厳な「自然」である。

確かに「生物を冷笑する」が如き悠大な自然の中では「個人感」を極めることができる。

しかし独歩はそれと共に、有限かつ儂い人生と無限・悠久な自然という対比を見て、むしろ、恐怖感すら覚えてしまうのである。よつて、心は序々に温かい人實の方へ傾いてゆく。

また、この人生と自然という対比は、ある種の悲哀感^{〔悲感〕}を伴うものである。

さて、峯雄の自然観をこの独歩の自然観と比較するとうどうであらうか。

峯雄は故郷の「高塔」の丘に登り夏の日を浴びて、「ただ理由もなく身が軽くなつて、気が確然りして、

何か心に深く決する処あるかの如く感じて横行闊歩する」と述べているように、自然から「一道の活気」を与えられるのである。また同じ丘で、「自然の不羈奔逸の氣」が「勃々として自分に迫るを感じ」るのであるが、ここでも悠大な自然からある活力を得ている。

しかしこの自然は、小川綾子を将来の妻として思慕し、自由の生活を夢見る希望に燃えた青年には「活気」を与えているが、後に綾子を失つて絶望する青年には「冷然として」迎えるのであつた。つまり、峯雄をとらえた自然は、人間の心理と交渉をもつものである。

それに対し、空知川で独歩が出会つた自然は「社会」を忘れさせ、「生存其者」のみを感じさせるほど冷厳なものだつた。当然ながらこのような自然は人間の内部などには無頓着である。

よつて、人間の心理に同調する温かい自然に触れている峯雄には「有限かつ儂い人生」と「無限・悠久の自然」という厳しい対比、またそこから起る「悲哀感」の意識はないと言えよう。

(Ⅳ)

今までの章で青年独歩の体験した「田園生活」によつ

て得た意識について述べてきた。それらは次の三つに分けられる。

①（麻郷への帰省の時）

「山林の一良民」として生きるか、現世的野心をまっとうさせるか、という相剋。

②（佐伯への赴任の時）

「宇宙」と「人間生命」の不可思議な関係を解こうとする意識。

③（空知川の沿岸で）

「有限の人生」と「無窮の自然」という対比から生じる哀感。

この三つの意識は、独歩の作品の題材に各々生かされている。しかしこれまで見てきたように、「田園生活」の体験を背景に持っているにも関わらず、『帰去来』にはどれもあてはまらないのである。

峯雄は立場を「都市」に置いているので①の相剋は起こり得ない。また、自然を賛美しているが、それはいわゆる天地山川の自然であって、②③のような自然の本質を追求しようとする真摯な姿勢はないと言える。

それでは『帰去来』はどのような視点で読めばよいのであろうか。単なる悲恋小説ととらえてしまつてよ

いのか。

それでは、『帰去来』を書かせた動機は何であったか、制作年の独歩の状況から考察してみたいと思う。

明治三十三年二月、独歩は『民聲新報』に編集長として入社した。『民聲新報』は、星亨^{（注27）}の機関新聞であり「当時は島田三郎対星亨の政敵関係から毎日新聞と日々激しい論争があつた。」^{（注28）}

この活気に満ちた編集局で彼は、「常に熾んなる気炎を吐きつ、又気炎その如き辣腕を揮つて居」たと言われている。また、三十四年三月頃には星亨と提携して、政界出馬の意をもって銚子方面に運動した。

これから察するに、独歩はかなり政治に関心を寄せていた。『民聲新報社』の同僚三島霜川も独歩について、「君は其の時分文芸から多少遠ざかつて居たやうな気味がありはしなかつたかと考へられる（中略）文芸に遠ざかつていた理由としてはその時分は政事の方に興味を持って居たのではないかと思はれる。」^{（注29）}

と述べている。また、文筆活動の面から見ても、入社した三十三年十二月末から、退社する三十四年七月までの間、彼の著作の中で小説らしい小説は『帰去来』ただ一つである。^{（注30）}

そこで、『帰去来』が浮かび上がったことに注目したい。この作品は、独歩が「文芸から遠ざかり」、「政事の方に興味を持つて」いたという特殊な時期に生まれた作品なのである。ここに、制作の動機のヒントになるものがあるのではないだろうか。

結論から先に述べると、名利競争の野心にかり立てられた「反動」が独歩に『帰去来』を書かせたと考えられるのである。

斎藤弔花が、

「^{注32}其時余は国木田家に寄寓して居た（氷川町の宅に）當時の窮境は甚しかった。独歩君の文章の価値は少しも世間から認められず、金の入る処がない。」

と回想しているように、当時の生活はさし迫っていたようである。また、三十四年三月十一日に単行本『武蔵野』^{注33}が刊行されるが「世間からは何等の反響もなかった。」^{注34}という。

そこで、政治面あるいは文壇で名声を得ようとする生活に、ふと儂さを感じた独歩は、名利競争の野心を捨てて「山林の一良民」として生活することを理想とした青年期を憧憬し、『帰去来』を書いたのではないだろうか。

しかしいくら憧憬しても、新聞事業に懸命に取りくみ、政治への熱意をもつ独歩には、「眼前三尺の先に浮動する処の金色体」を追う生活からにはや抜け出すことはできない。

ここに、峯雄が前述①②の意識を持っていない理由が求められる。

峯雄の「都会に居て（中略）面白くないやうなら、何時でも、直に足の塵を払って此故郷に帰て来る」という曖昧な立場は何故か。

つまり、独歩は分身峯雄を通して名利競争への熱意の片鱗をのぞかせたのである。田園に憧れながらも、都会での生活を完全に捨てることなどとてもできなかったわけである。

このような立場、すなわち「社会感」に浸った状態からは「宇宙」と「人間生命」の不可思議な関係を探こうとする意識は生まれ得ない。

また、『帰去来』の中に波野英学塾のことがまったく書かれていない点も次の如く推定できる。塾開設の密かな目的が「教育者として名声を得る」^{注35}ことであつたと考えると、現在既に名利競争に駆られている自己を、自由な青年期をモデルとした作品中にまで同じ形態で登場させたくなかったのではないだろうか。

『病状録』^(注36)(明41・7・15)の第四章「芸術観」に、「窮迫当時は却って「帰去来」「小春」の如きものを製作せり。」と記されていることから、独歩は「帰去来」に疲労した精神の拠り所となる世界を内包させたと考えられる。この場合、疲れた精神を受け入れられるのは、人間に温かく、また活力を与える自然である。独歩が空知川沿岸で見た「生物を冷笑する」が如き冷厳な自然ではあり得ない。

これは、峯雄が前述の③の意識——「有限の人生」と「無窮の自然」という対比から生じる哀感——を持たない理由となるのではないだろうか。

独歩は、「山林の一良民」を理想とした頃を憧憬しながらも、現世的野心を捨てられない。その彼が峯雄に、

「戦闘！ さうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞ夫れ戦闘それ自身が人の運命だ。」
と言わせているのである。

従ってこの言葉は、波野英学塾の経営と恋愛の際にぶつかった封建社会の壁への挑戦、ととらえられると共に、名利競争、現世的野心をまっとうしようとする決意とも聞こえるのである。

注

(1) 『国木田独歩全集』第十卷所収の「発表年月日順著作目録」

(2) 桑原伸一「国木田独歩——山口時代の研究」(昭47・5 笠間書院 第三章では、独歩の崇拜していた徳富蘇峰は、「新日本の文化、創造を荷うのは一八六〇年代生まれの青年であることを強調していた」ので「当時の青年、学生の人気中心」であった。また、彼の「平民主義」は、「豪農層の自己主張と政治権益の要求が秘められていたのであるが、表面的には田舎賛美であり、自然尊重、反都会主義という進歩的要素も含まれており、(中略)青年、学生には帰郷をすすめる運動でもあった。」と評されている。

(3) 注2に同じ。独歩の「(前略)キリスト教精神を基盤とした平民主義」の鼓吹は、田舎では受け入れられず塾生は「漸次減少して」いったという。

(4) 北野昭彦「帰去来」——「山林の自由の生活」と現実との衝突」(昭49・9 桜楓社『国木田独歩の文学』所収)には、「石崎家は朝鮮貿易で資産をなした豪商であ」り、国木田家とは「家の格が問題になら」なかつた。そして、「クリスチャンの独歩を嫌っていたため(中略)兩人を別れさせるための裏面工作がなされた」とある。

(5) 明治二十五年一月二日付の田村三治宛書簡で、

「(前略) 去年の正月は東京に在りて面白かりしも本年は田舎の正月、一つも面白くなし正月は都会に限るが如し田舎の正月の面白くなきは蓋し新舊曆一致せざるに在り。」

と述べており、独歩の心は既に田舎の生活から離れてしまっている。

(6) 前出の注2参照

(7) 明治二十四年二月に英語政治科の改革を要求して学友とストライキを執行、同年三月末に退学届を出している。

(8) 前出の注2に同じ。

(9) 国木田収二「独歩の半生」(『新潮』明41・7・15)

(ただし全集第十卷所収文より引用)

(10) この頃独歩は吉田松陰に心酔しており、「(前略)

吉田松陰の熱心なる崇拜者なりしかば余も亦彼の最大なる事業ともいふべき、松下塾の如きを起して郷党を集め、所謂精神教育を施したしとの空想を懷き居たり。」

と述べている。(前出「独歩の半生」)

(11) 明治二十四年十二月二十四日、大久保湖邦宛書簡。

(12) 桑原伸一氏は「国木田独歩―山口時代の研究―」

第三章の中で、独歩は「自由党の新聞記者となり」さらには「運よく政界への雄飛も可能ではないかと夢想する」と述べておられる。よって当時の独歩は政治に関心があったと思われる。

(13) 「『青年文学』」は明治二十三年十月新文学運動の母

体として民友社を中心に「青年文学会」が組織されるが、その機関紙として明治二十四年十一月に創刊された。」(前出の注2に同じ)

また、「『青年文学』」が密かに期する所は、我文壇否我社会に於て尤も欠乏しある所の真摯を以て起ち、真摯を以て歩し、終には真摯を以て満天下を風化せん、とするにあり」と、猪野謙二氏は「独歩評伝」(『明治の作家』昭41・11岩波書店)の中で述べておられる。

(14) 「欺かざるの記」明治26年6月20日

(15) 「欺かざるの記」明治26年7月7日

(16) 独歩は、「則ち個人感と社会感と之れドラマと信仰の差ならん。ドラマは社会感の活動ならん。信仰理想は個人感の終極ならん。」と述べている。また、「シンシリティは個人感の真の入口」であり、「此シンシリティを殺す者は社会感なり。故に人間墜落の最要件は社会感なり。」としている。「欺かざるの記」明治26年7月20日

(17) 独歩は、「社会感なる者は己れを社会の裡に見出し、個人感なる者は天地の間に見出す者」であると述べている。「欺かざるの記」明治26年7月28日

(18) 「欺かざるの記」明治26年9月14日

(19) 「欺かざるの記」明治26年10月23日

(20) 「欺かざるの記」明治27年4月17日

(21) 「欺かざるの記」明治27年4月11日

(22) 鶴谷学館には「早くから独歩を崇拜する生徒と、その反対派(漢学派)があ」り、独歩は「その渦中

に巻き込まれて、排斥運動の矢面に立たされ」た。(前出の注2に同じ) またさらに、柳井市での印刷所経営の夢も破れ、田舎の生活につまりなさを覚えた彼は二十七年九月三日に上京の途に着いている。

(23) 『欺かざるの記』 明治27年9月8日

(24) 『欺かざるの記』 明治28年7月3日

(25) 『欺かざるの記』 明治28年6月25日

(26) 丁隠生「独歩論」(『趣味』 明治40・4・1) の次の文章によった。

「独歩氏の作物は全体を通じて一種悲哀の調が流れてゐる。氏は作をする時に特別に自然と人間との関係について、人間の果敢なく、自然の偉大にして悠久なる事を表らはそうとしてゐるのではあるまいか氏の如何なる作物を読んで見ても読者の胸中に此悲哀感が流れては入る。」

(27) 星亨について猪野謙二氏は「独歩における『政治』

——吉田松陰から星亨へ」第四節「明治の作家」所収)の中で、「(前略) 明治三十三年に、時の憲政党

——さきの自由党は、ついに当面の敵であつた藩閥の首領伊藤をその総裁とする立憲政友会に身売りし、

(中略) この身売りの張本人こそが、ほかならぬ旧自由党の領袖星亨であつたのだ。かつて明治十年代

の熱烈な政府反対派から保安条令発布後二十年代の支持派への転向をもつとも典型的にやつてのけ、山

県、伊藤の藩閥と妥協して、最後には名だたる東京市政腐敗の中心になつた。」

と述べておられる。また、この星亨に独歩がなぜ「自己の政治的欲求のすべてを賭け」たか、という問題については、独歩は星の「数奇なる生い立ちそのものに、終始自分とその出生の秘密をともしにするという親近さを感じていたのではないか」と記されている。

(28・29) 原田秋浦「民聲新報時代の独歩氏」(『趣味』 明治41・8・1)

(30) 三島霜川「民聲新報時代の独歩氏」(『新潮』明治41・7・15)。ただし、ここでは『国木田独歩全集』第十

巻所収文を引用した。

(31) 前出の注1に同じ。

(32) 斎藤弔花「懐しき友独歩」(『中央公論』明治41・8・1) (前出『国木田独歩全集』第十巻所収文より引用)

斎藤弔花は、「不図七年前の記憶を喚び起こした」という設定で七年前の二月の「雪催」の日のことを回想してこの文章を書いているので、四十一年から

逆算して三十四年ごろと推定できる。

(33) 前出の注1に同じ。

(34) 原田秋浦「不遇時代の独歩君」(『中央公論』明治41・8・1) (前出『国木田独歩全集』第十巻所収文より

引用)。

(35) 本文第1章参照

(36) 編輯者真山彬

○文中の作品、書簡はすべて『国木田独歩全集』(学習研究社)所収のものを使った。

○『欺かざるの記』は、『国木田独歩全集』（学習研究社）の六巻及び七巻所収のものによった。
○文中の年月日及び事項は、特に記さない限り『国木田独歩全集』（学習研究社）第十巻所収の「国木田独歩年譜」によった。